

## 自他の違いやよさを認め、学び合う児童生徒の育成

### —アクティブ・ラーニング型の「ぬくもり」の実践を通して—

福岡市は、解決すべき人権課題を「同和問題」をはじめ8つのカテゴリーに整理し、その解決に向けた取組を行っている。また、その解決に向けては、学校での人権教育が重要であり、「人権問題に関する市民意識調査」からも学校教育への期待が伺われる。そこで、福岡市は、人権読本「ぬくもり」改訂3版（※以下「ぬくもり」）を作成・配付し、学校現場においては、「ぬくもり」を活用した様々な取組が実践されている。

以上のことから、本研究室では、「ぬくもり」の効果的な活用方法を考えた。児童生徒が主体的・協働的に授業に取り組めるよう、実態や授業のねらい等、そのときの課題に合わせて、様々な場面において活動や交流を取り入れた「アクティブ・ラーニング型」の授業を行い実証してきた。その結果、児童生徒が意欲的に授業に臨むだけでなく、友達との交流の中で、多様な考えに触れ、自他の違いやよさを認め合い、学び合う児童生徒の姿が見られるようになってきた。さらに、授業後には、人権課題に対する意識の向上や解決へ意欲的に活動するようになった。

第Ⅰ章 研究の基本的な考え方	人 - 1
1 主題について	
(1) 主題設定の理由	
ア 人権教育の今日的課題から	
イ 福岡市の実態から	
(2) 主題及び副主題の意味	
ア 「自他のちがいやよさを認め、学び合う児童生徒の育成」とは	
イ 「アクティブ・ラーニング型の『ぬくもり』の実践」とは	
2 研究の目標	人 - 4
3 研究の仮説	人 - 4
4 研究の構想 (内容・過程・手だて・検証の方法等)	人 - 4
5 研究構想図	人 - 5
第Ⅱ章 研究の実際	
A 小学校第6学年 道徳「言葉について考える」	
1 実践例	人 - 6
2 分析と考察	人 - 9
B 小学校第5学年 道徳「鳴らないスマホ」	
1 実践例	人 - 11
2 分析と考察	人 - 14
C 小学校第2学年 道徳「パンとメッセージ」	
1 実践例	人 - 16
2 分析と考察	人 - 19
第Ⅲ章 研究のまとめ	
1 研究のまとめ	人 - 20
あとがき	人 - 21
資料等	人 - 22

# 第 I 章 研究の基本的な考え方

## 1 主題について

### (1) 主題設定の理由

#### ア 人権教育の今日的課題から

「うざい」「きもい」などの言葉を耳にする。互いに助けたり励ましたりする温かい言葉を使う一方で、児童生徒は日常的にこのような他者を傷つける言葉を使うようになってきている。いじめや不登校、差別的な言動についてのニュースが数多く流れており、中には、偏った知識や自他を尊重する態度がともなっていないことで招かれたものも見られる。地域社会においても、児童生徒同士の人間関係を育てることや地域の人とのかかわりが希薄化してきている。その結果、お互いに相手に思いをうまく伝えることができず、トラブルにつながることもある。

また、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境は大きく変化し、児童生徒が就くことになる職業の在り方についても、現在とは様変わりすることになるだろうと言われている。PISA の結果からも、我が国の子どもたちは自分の考えを述べることについて課題があること、自己肯定感や学習意欲、社会参画の意識等も低いと指摘されている。

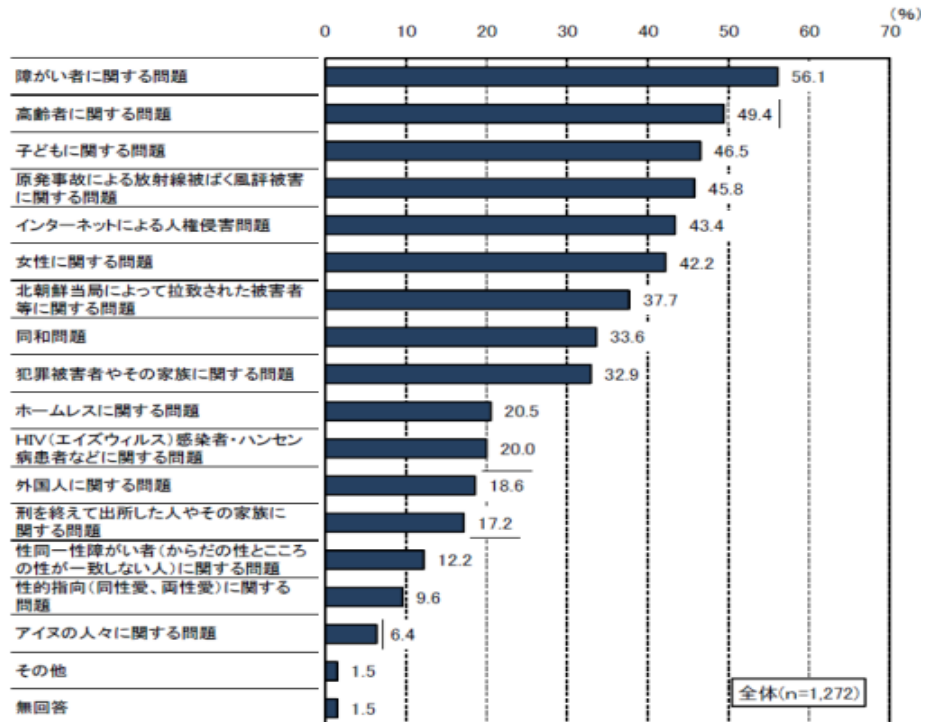
こうした変化を乗り越え、高い志や意欲をもつ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り拓いていく力を身に付けていく必要がある。そのために、基礎的な知識・技能を正しく習得するとともに、自ら課題を発見し、その解決に向けて児童生徒が主体的・協働的に探究しながら、実践に生かそうとする態度を育成する教育は大切なものである。

このようなことから、「認知的、論理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成」を図ることを目指すアクティブ・ラーニングの具体的な在り方について考え、充実させていくことは必要なことだと考える。

#### イ 福岡市の実態から

福岡市では、H25 から「いじめゼロプロジェクト」として、標語作りやいじめゼロサミット等、各学校そして福岡市全体で、いじめ撲滅へ向けた取組が行われている。たしかに、学校でのいじめの認知件数や不登校児童生徒数は少しずつ減少してはいるものの、認知件数はまだ少ない。

また、差別発言の事象は、平成26年度は同和



図一1 関心を寄せる人権問題

問題4件、障がい者問題58件、外国人問題4件となっており、増加傾向にある。これらの発

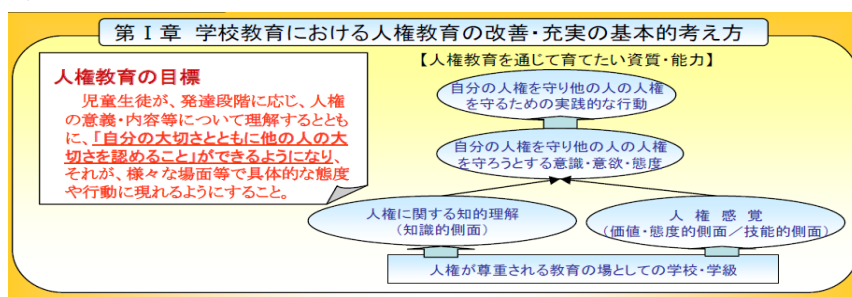
言は、正しい理解がないまま使っていることもあり、知識的側面に課題がある。

福岡市の市民対象に行われた、「人権問題に関する意識調査(平成24年)」によると(図一1), 障がい者に関する問題を始め、関心を寄せる人権問題は多領域に広がる。さらに、「人権問題の理解を深めるのに役立つと思われるもの」では、「学校での人権教育」が55.5%となっている。その数値は、18.5%だった平成元年度の調査と比べ、学校での人権教育への期待度は高くなっていることが分かる。そのような中で、福岡市の人権8課題に対応する地域の教材として「ぬくもり」を扱うことは、様々な人権問題についての知識的側面、価値・態度的側面、技能的側面の習得の上でも有意義であると考えられる。

## (2) 主題及び副主題の意味

ア 「自他の違いやよさを認め、学び合う児童生徒」とは

「人権教育の指導方法等の在り方について〔第二次、第三次とりまとめ〕」には、人権教育を行う上で、学校において培うことが求められる資質・能力等について次のようにまとめられている。



図一2 「人権教育の指導方法等の在り方について」〔第二次とりまとめ〕より抜粋

- 他の人の立場に立ってその人に必要なことやその人の考えや気持ちなどがわかるような想像力、共感的に理解する力（他人の立場に立つ想像力）
- 考えや気持ちを適切かつ豊かに表現し、また、的確に理解することができるような、伝え合い、わかり合うためのコミュニケーションの能力やそのための技能（コミュニケーションの技能）
- 自分の要求を一方的に主張するだけでなく、建設的な手法により他者との人間関係を調整する能力及び自他の要求を共に満たせる解決方法を見出して、それを実現させる能力やそのための技能（人間関係を調整する能力）

以上のことから、本研究では「学び合い」を以下のように定義づける。

「学び合い」とは

- ① 伝える（他の人の立場に立つ想像力）  
自分の経験や知識と結び付けて、自分の考えを伝えること。一方で、相手の意図を受け止めて、最後までしっかりと聞くこと。
- ② つなぐ（コミュニケーションの技能）  
お互いの考えから類似点や相違点を見つけ、考えを膨らましたり、まとめたり、新しい考えをつくり出したりして、考えをつないでいくこと。
- ③ 認める（人間関係を調整する能力）  
自他の見方・考え方や立場の違いを理解した上で、それぞれのよさを見出し、自他を尊重すること。
- ④ 高める（人間関係を調整する能力）  
よいところや必要なことを相互に取り入れ、お互いに高め合おうとすること。

## イ 「アクティブ・ラーニング型の「ぬくもり」の実践」とは

### ○アクティブ・ラーニング型とは

文部科学省には、以下のようにアクティブ・ラーニングについて定義している。

アクティブ・ラーニングとは、教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。

【文部科学省】

さらに、学習・指導方法について、以下の3つの観点を挙げている。

- ① 習得・活用・探求という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているか。
- ② 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか。
- ③ 子どもたちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか。

そこで本研究では、この手法を取り入れた児童生徒の主体的・協働的な学習活動づくりをアクティブ・ラーニング型として研究を進める。

### ○「ぬくもり」とは

「新しいふくおかの教育計画」にも掲げる人権教育の推進にあたり、児童生徒の人権感覚を高め、様々な人権問題の解決に取り組んでいこうとする実践的な行動力を育成するために、学校教育において活用することを目的として、平成4年(1992年)から使用されてきた。初版及び改訂版は、福岡市教育委員会と同和教育研究団体等の協力によって著作編集され、小学校、中学校及び特別支援学校に配布し、道徳の時間等に活用されてきた。

「ぬくもり」は、福岡市における人権教育のスタンダードとして、部落問題への理解をはじめ、さまざまな人権問題への意識を高め、児童生徒の人権感覚の育成に大きな役割を果たしてきた。「ぬくもり」では、児童生徒が現実に出合う人権課題に即したものを精選している。

### ○アクティブ・ラーニング型の「ぬくもり」の実践とは

アクティブ・ラーニング型の「ぬくもり」の実践とは、読みものとしてだけでなく、児童生徒が教材からどんな人権課題があるのか考え、その解決に向けて考えを出し合いながら、主体的・協働的な学びを目指す実践である。そこで、昨年の本研究室の実践のSEL-8SやSGEを生かしながら、子どもたちの身近な人権課題に即した「ぬくもり」を活用していく。その中で、自分たちの身の回りにある人権に関わる問題を知り、価値の内面的自覚を深めていくとともに、人権感覚を育てていく。そして将来、これらの課題に対して、解決していく力を育成することができると思う。

## 2 研究の目標

アクティブ・ラーニング型の「ぬくもり」の実践を通して、自他の違いやよさを認め、学び合う児童生徒を育成する。

## 3 研究の仮説

「ぬくもり」の指導において、児童が主体的・協働的なアクティブ・ラーニング型の授業を行えば、お互いの違いやよさに気づき、かけがえのない存在として認め、学び合う児童生徒の育成ができるであろう。

## 4 研究の構想（内容・過程・手だて・検証の方法等）

### （1）研究の過程

ア 事前調査・事後調査（Q-U アンケート・児童に対するアンケート）

年に2回Q-Uアンケートを実施する。その結果から、クラス全体や個人の変容を分析する。

また、過去に学んだ人権学習の内容や課題への考えに関するアンケートをとり、分析を行う。

イ 抽出児童生徒を設定

研究をより明確にするために、抽出児童生徒を設定する。実証授業後、アンケートの結果だけでなく、普段の生活の様子、背景を含めて分析する。

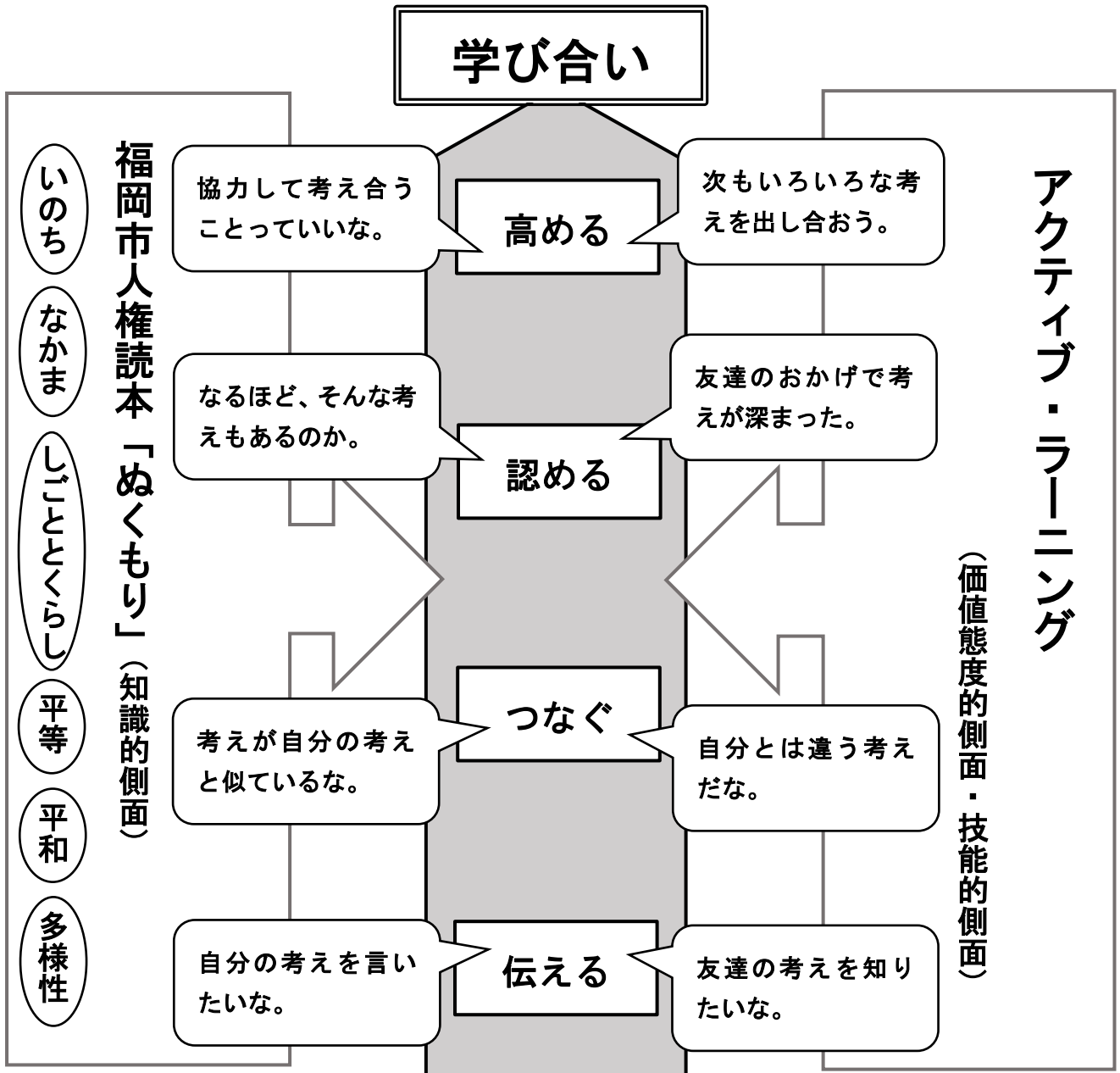
ウ 実証授業の実施

抽出児童生徒と学級全体の変容を目指し実証授業を行う。その際、お互いの違いやよさを認め、学び合う意欲や態度を高めるためにアクティブ・ラーニング型の「ぬくもり」の実践を検証する。

### （2）アクティブ・ラーニング型の「ぬくもり」の実践における手だて

- 安心できる環境づくりのためのSGE・SEL-8Sの活用
- 人権課題を考えさせるための「ぬくもり」の題材提示の工夫
- 中心場面での主体的・協働的な活動の工夫
- 振り返り時間の確保

自他の違いやよさを認め、学び合う児童生徒の育成



福岡市・学級の実態

いじめ・不登校問題・ガイジ発言・ぬくもりの活用状況・アンケート 等

※以下、「アクティブ・ラーニング」をALと表記する。

## 第Ⅱ章 指導の実際と支援

### A 小学校第6学年

#### 1 実践例

実施時期	SEL-8S・SGE	ぬくもり
9月1回目	正しい聞き方 (B 自己・他者への気づき, 聞く)	
2回目	相手はどんな気持ち (B 自己・他者への気づき, 聞く)	
3回目 本時		言葉について考える (平等)
10月1回目	じょうずにたずねよう (B 自己・他者への気づき, 聞く)	
2回目	断る方法いろいろ (C 伝える)	
3回目		鳴らないスマホ (なかま)
11月1回目	入れて (D 関係づくり)	
2回目	トラブルの解決 (D 関係づくり)	
3回目		いじられキャラ (なかま)

(1) 題材名「言葉について考える」 公正・公平 高学年 4 - (2) (9月の実践より)

#### (2) 目標

- 身近にある差別に気づき、進んで差別をなくそうとする態度を養う。(ぬくもり教材の視点)
- 言葉づかいや相手の言葉づかいについて考え、日常使っている言葉の中にも差別する気持ちがあることに気づくことができる。(人権教育の視点)
- 題材の中から課題を見つけ、その課題について友だちと交流し、多様な考え方があることに気づくことができる。(ALの視点)

#### (3) 児童の実態

本学級の児童は、委員会活動や学級内での仕事を進んで行う児童が多く、全体的に明るいクラスである。しかし、一人二人と落ち着きがなくなり、騒がしい雰囲気をつくってしまう。そして、特定の友達とだけ関わって他の友達とはあまり関わろうとしない児童も見られる。けんかの時などは一方的な発言を繰り返し、相手の言葉に対してまったく反応しなかったり、差別的な意味を含んだ文句を言ったりすることがある。

6月に実施したQ-Uアンケートの結果を見ると、学級生活満足群が37% (14人)、非承認群39% (15人)、侵害行為認知群3% (1人)、学級生活不満群が21% (7人)である。(図-3)学級生活に満

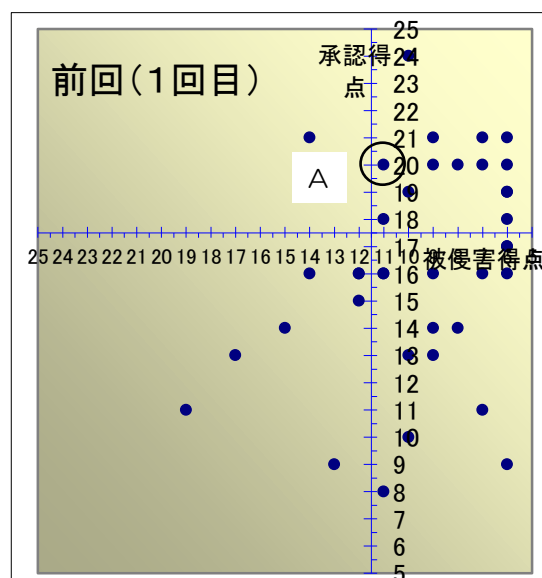


図-3 事前のQ-Uアンケート結果



足している児童から、存在感を感じられていない児童まで階層化している。授業中では、「同じ考えです。」や「似ている考えです。」など自分の考えを積極的に発表する姿が見られる一方、特定の児童だけで発表をつなげてしまうこともある。なかなか考えをもつことができない児童は、発表にも消極的で学習に対して自信をもてずにいる。理由としては、児童の関係性が固定化していることと、自分の意見に自信がもてず、発表の機会が少ないことが考えられる。そのため、SEL-8S・SGEを取り入れることで、話す力、聞く力を育て、児童が安心して発表できる機会を増やす必要があると考える。そして、「ガイジ」という言葉を聞いたことがあると答えた児童は29名、聞いたことがないと答えた児童は7名であった。また、「ガイジ」という言葉の意味を知っていると答えた児童は14名、意味を知らないと答えた児童は22名であった。このことから、言葉の意味を知らずに使ったり、言葉の差別性を知っているのにわざと使ったりしていることが考えられる。本題材において、問題場面に対して自分がどのように考えるのか、友達がどのように考えたのかを交流することを通して、日常使っている言葉について考えることは、大変意義深いと考える。

#### 抽出児童について

##### A児の実態

A児は、Q-U アンケートでは、学級生活満足群に属しているが、生活習慣が身に付いておらず、学習道具がそろわなかったり、遅刻が多かったりすることで学習内容の定着が難しい。自分の考えに自信をもつことができず、授業中積極的に発表したり、ねばり強く活動したりすることが極端に少ない。友達関係においては、トラブルの時に一方的に自己主張をしたり、平気で相手を傷つける言葉を発したり、嘘をついたりすることがある。そして、自分だけの価値基準に照らし合わせて物事を考え、友達を困らせることが多くある。A児のよさを認めてくれる児童が少ない。しかし、集中して考えると、自分なりの視点から問題に取り組み、問題の本質を捉えた発表で、みんなを納得させることがある。

#### (4) 指導の実際

##### ア ねらいとする価値について

本題材は「自分たちの身近にある差別に気づき、進んで差別をなくそうとする態度を養う。」ことをねらいとしているものである。人はいけないこととわかっているとしても、つい相手に対して偏見をもち、それを差別的な表現を通して顕在化させてしまうことがある。福岡市において平成26年度の差別発言の事象は、同和問題4件、障がい者問題が58件、外国人問題4件となっており増加傾向にある。日ごろためらいもなく「うざい」「きもい」などと相手を傷つける言葉を使う実態がある。このような実態から、子どもたちに日常的に使っている言葉のなかには差別用語も含まれていることに気づかせたり、言葉のもつ意味について考えさせたりすることは大変意義深いと考える。

##### イ 資料の活用について

本資料は、「左足を骨折したぼくが、同じクラスの一郎と言い争いになる中で、一郎から『ガイジ』と言われる。次の日、友達と話し合う中で、ぼくは自分の中にあつた障がいのある人への差別の心に気づき、さらに考えを深めていこうという気持ちになる」という内容である。

導入では「ガイジ」と言った言葉の意味や言葉の持つ影響について説明し、日常使っている言

葉について考えさせた。展開前段においては、まず、挿絵を使って本資料の内容を確認した。その際に、一郎がぼくに対して「ガイジ」と発言したこととぼくが「ガイジ」と言われて嫌だった気持ちを確認した。そして、3人（ぼく、一郎、正）の言動についておかしなところを考え道徳ノートに自分の考えを書き、その後黒板に自分の名札を貼らせた。次に、班に分かれて自分たちの考えを交流し、一郎だけではなくぼくにも差別の心があることに気づかせた。展開後段では、一郎に「ごめん。」と言われたぼくの気持ちについて考えさせた。終末では、日常生活において、これまでに気づくことのできなかった差別する言葉について振り返り、これからどうすれば差別する言葉をなくすことができるか具体的に考えさせた。

#### ウ ALの視点から

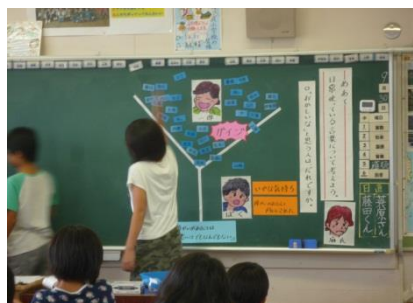
事前に「ガイジ」という言葉についてのアンケートを行った。その結果、その言葉の意味を知らず使っている場合があることが分かった。そのため、本資料を配布する前に「ガイジ」という言葉の意味について指導した。

本資料は「ガイジ」という言葉が差別的意識をもって使われていることが容易にわかる。しかし、主人公の心の中にも差別的な気持ちがあったことはわかりにくい。そのため、事前に本資料を配布し、登場人物の言動のおかしさについて考えさせておいた。

本時では、登場人物の言動のおかしさについて考えたことを子どもたち一人ひとりが黒板に名札を貼りつけた。黒板を見て一郎の言動がおかしいと感じる意見とぼくの言動がおかしいと感じる意見を出したことで、友だちがなぜそのように考えたのか知りたいと意欲が高まったと思われる。交流後、再び子どもたちの意見を黒板に表示させることで、視覚的にも子どもたちの考えを確認することができ、多様な考え方があることに気づくことができた。そして、子どもたちが日常使っている言葉について関心をもつことができた。

	学習活動と内容	教員の支援
導入	1 本時学習のめあてを知る。 ○自分たちが日常使っている言葉について考える。	○友達に対して、いい気持ちにさせる言葉だけではなく、ふざけて嫌な気持ちにさせる言葉や、傷つける言葉を使っていることに気づかせ、本時のめあてへとつなぐ。
	めあて 日常使っている言葉について考えよう。	
展開前段	2 資料「言葉について考える」の内容を確認し、おかしなところについて考える。 ○ぼく、一郎、正の言動からおかしなところを考える。 ・一郎 「ガイジ」の言葉から障がい者に対して差別する気持ちがある。 ・ぼく	○範読をして、資料の内容を確認する。 登場人物：ぼく、一郎、正、麻衣 内容：一郎がぼくに対して「ガイジ」と発言したことやぼくが「ガイジ」と言われて嫌だったこと。 ○3人の言動からおかしいと思ったところの登場人物の枠に名札を貼らせる。

	<p>「ガイジ」と言われて、障がい者と同じように思われて、嫌だったこと。</p> <p>○自分の考えを黒板に貼り付ける。</p> <p>○班に分かれて、3人の立場からの考えを交流する。</p> <p>○3人の立場からの考えを発表し、おかしなところをまとめる。</p>	<p>○ぼくの立場からの意見が出なかった場合には、資料からぼくがなぜ嫌だったのかを発問する。</p> <p>○障がい者に対する差別の心がぼくの中にもあることを気づかせるために、板書の名札を確認させたり、班で一人ひとりの発表の時間を十分に確保したりする。</p> <p>○本資料から知らず知らずに差別していたかもしれないことに気づかせる。</p>
展開後段	<p>3 一郎に「ごめん」と言われた、ぼくの気持ちについて考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ぼくたち、二人とも間違っている。</li> <li>・「ガイジ」という言葉を使う人には注意していこう。</li> </ul>	<p>○ぼくが何を一郎に伝えたか考えさせることで、「ガイジ」という言葉について、自分たちで問題意識をもち、なくしていこうとするぼくの気持ちに気付かせる。</p>
終末	<p>4 自分の生活をふりかえり、これからの言動について考える。</p>	<p>○道徳ノートに書いた日常使っている言葉についてふりかえらせ、相手が嫌な気持ちにならないために、これから自分が気を付けることを書かせる。</p>



図一4 自分の意見を表示する様子



図一5 意見を交流する様子



図一6 交流後の板書の様子

## 2 分析と考察

### (1) 児童に対するアンケートの結果から見る学級全体の変容

「言葉について考える」の学習後に言葉に関するアンケートを行ったところ、「知らないうちに差別する言葉を使っていた。」「これからは、意識しながら言葉づかいをしていきたい。」「まずは、自分が言われて嫌な言葉は当然相手も傷つけてしまうから、使わないように気を付けていきたい。」といった意見が多く書かれていた。またほかの意見として「自分の中にあった差別する気持ちや嫌だった気持ちに気づくことができた。」「友達の見解を聞いて、自分の意見との違いを知ることができて考え方や見方が変わってきた。」「みんなで考え解決方法を生み出していくことが楽しい。」などの意見もあった。これは、AL型の「ぬくもり」の授業において、個人または集団で身近にある人権課題を見つけ、その解決方法を考えたことを通して、児童が自分の意見に自信をもつこ

とができたと考えられる。そして、友だちと交流したことで日常の言葉について関心が高まったととらえることができる。

## (2) Q-U アンケートの結果から見る学級全体の変容

AL 型授業の実践前後での児童の変容を調べるために、12月に Q-U アンケートを実施した(図-5)。Q-U アンケートの結果を見ると、学級生活満足群が67% (23人)、非承認群16% (6人)、侵害行為認知群11% (4人)、学級生活不満足群が11% (4人)と全体的に学級生活満足群の割合が高くなり、非承認群の割合が低くなった。たくさんの意見に触れたことによって、多様なものの見方や考え方があることを理解し、お互いに他者需要が促されたと考える。そのことで、自分の意見が認められたと感じることが多くなり、自信をもつことができる児童が増えた。AL 型の授業を行うことは、お互いの人間関係を豊かにさせ、学び合う児童生徒を育てることにおいてとても有効であったと思われる。

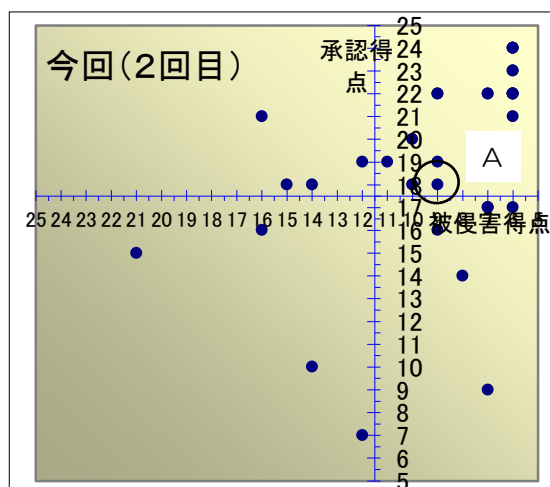


図-7 事後のQ-Uアンケート結果

## (3) 抽出児童生徒の変容

### A児

実証授業前後の Q-U アンケートでは、学級生活満足群に属している。Q-U アンケートの結果からは、大きな変化は見られなかった。しかし、集会活動では、リーダーとして下級生に対して的確に指示を行ったり、優しく声をかけ助けたりする姿が見られた。学級内においても友達との約束を守ったり、自分の役割に対して責任感をもって活動したりすることが多くなってきた。要因としては、AL 型の授業を通して、意欲的に人権課題を見つけたことで、自分の意見に自信をもつことができたからだと考える。そのことで、自分の意見を積極的に発表することができたと思われる。そして、友だちが優しく受け入れてくれたことで、より大きな自信につながったと考える。

## (4) 課題

自ら課題を見つけることで、子どもたちからは多様な意見が出るのが予想される。そのため、児童の把握を多面的に行わないと、単位時間内におさめることが難しい。児童が主体的・協働的に取り組めるように、学習教材・学習過程・学習形態についても研究を重ねる必要がある。道徳の学習だけでなく、すべての学習において指導者が意識して行うことで、より一層の効果が望めると考える。

## B 小学校第5学年

### 1 実践例

実施時期	SEL-8S・SGE	ぬくもり
9月 1回目	わかりやすく伝えよう (C 伝える)	
2回目	広告パズル	
3回目		いつまでも目標をもって (しごととくらし)
10月 1回目	じょうずにたずねよう (B 自己・他者への気づき, 聞く)	
2回目	カウントアップ	
3回目	すきなのはどっち?	
4回目 本時		鳴らないスマホ (なかま)
11月 1回目	みんなで力を合わせて いろんな意見 (D 関係づくり)	
2回目	無人島SOS	
3回目		ありのままの自分 (平等)

(1) 題材名 「鳴らないスマホ」(ぬくもり) 自由・規律 高学年 1ー(3) (10月の実践より)

#### (2) 目標

- インターネットでのやりとりの実態を知り、交流を通して、責任をもって情報を発信しようとする心情を育てる。(ぬくもり教材の視点)
- 自分や友達のお互いのよさを認め、考えを深めることの楽しさを感じ、互いを高めていこうとする態度を養う。(人権教育の視点)
- 教材から課題は何かを主体的・協働的に考え、その課題について積極的に友達と関わり、様々な意見に触れる。(ALの視点)

#### (3) 児童の実態

本学級は、とても素直で、物事に対し、きちんと取り組もうとする児童が多い。与えられたことについてはきちんと真面目に取り組むことができるが、自分たちから周りを見て何かしようという姿勢はなかなか見られない。また、自主的に考え、相手意識をもって言動に気をつけようとする傾向はあまり見られず、思いがけず人を傷つけてしまう一面もある。トラブルになった際も、きちんと気持ちを伝えることができず、教員が間に入ることが多い。このことから、周囲のことを考えながら行動したり、課題に対して自主的に解決したりしようとする態度までは至っていないと言える。

また、6月に実施したQ-Uアンケートの結果を見ると、学級生活満足群が50% (17人)、非承認群が26% (9人)、侵害行為認知群が12% (4人)、学級生活不満足群が12% (4人)である(図-9)。4つの群に点在化しており、学級生活に満足している児童から、存在感を十分に感じられていない児童まで階層化している。学習規律も守られてきているが、小グループでまとまったり、発言力を持った児童が立場の弱い児童に対して優位に立とうとしたりといった言

動も見られる。

そのため、誰に対しても関係を持ち、話ができるリレーションを育み、自分たちで課題を解決していこうとするような学習活動を通して、多様な考えの違いやよさに気づくことが必要であるとする。

さらに、いわゆる文教地区で生活しており、携帯電話やスマートフォンの所有率が約 60%と高い（図一 8）。一方で、使い方についてのルールがある家庭は所有者の半数以下と不十分な状態である。児童に情報モラルを身に付けさせることは、喫緊の課題である。SNSでのトラブルは、高学年の時期に顕在化してくることが考えられる。また、今は経験がなくても、これから中学生になっていく児童にとっては、トラブルにならないように、未然に防ごうとする態度を育てる上で、SNSの必要性、それに伴う自分の責任を踏まえた自律的な行動について考えていくことは、大変意義深いと考える。

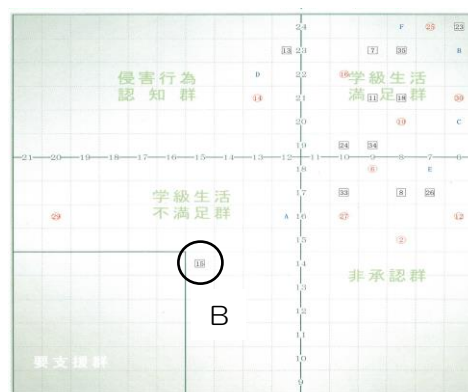
#### 抽出児童について

##### B児の実態

Q-U アンケートでは、学級生活不満足群に属し、人から注意されることが苦手で、嫌なことがあると大声を出す児童である。ものや人に当たることはほとんど無いが、自分が間違っていると「どうせ僕がダメなんだ」と自分のことを叩くことがある。また、周りの友達に対して不満があると、相手に対して暴言を吐くこともある。感情のコントロールが苦手なので、パニックのようになってしまうこともあるが、元々の性格は優しく、「大丈夫？」と声をかけたり、冗談を言って周りを笑わせたりできるので、友達と協力して取り組む姿も見られる。しかし、周りの児童は、B児に対して警戒している一面があり、距離を取る場面もある。

携帯電話を持っている・・・23人
携帯電話がほしい・・・8人
こわいイメージがある・・・22人
通信機器を持っている・・・35人
自由に使いたい・・・25人
ルールがある・・・8人
守っている・・・4人
嫌な思いをしたことがある・・・3人

図一 8 事前の人権に関するアンケート結果



図一 9 事前のQ-Uアンケート結果

#### (4) 指導の実際

##### ア ぬくもり教材の活用について

本資料「鳴らないスマホ」は、グループトークでの楽しいやりとりが、トラブルにつながっていくということから、情報機器を扱う際の相手への思いやりと自分の行動に責任をもつことの大切さについて考えていった。

学習の方向付けをするために、事前に行った意識調査の結果から、「携帯を持っている人が多く、ほしい人も多いのに、なぜこわいイメージをたくさんの人が持っているのか。」という発問で問題意識を持たせて、資料に向かわせた。

グループトークの楽しく便利な面だけでなく、わずらわしさやこわい面があることに気

付かせるために、討論形式をとって話し合いを進めていった。その際、それぞれの立場を5段階で表し、自分はどの立場なのかをはっきりさせた上で、意見を交流していくようにさせた。その中で、反対の立場や同じ立場でも段階に違いがあるため、自分との違いについて理由を聞き合う姿があった。それぞれの立場の考えを聞き合った後に、もう一度自分がどの立場かを考えさせ、どのくらい考えが変化するのかを見て取れるようにした。そのことで、友達と交流した意味について視覚的に捉えていた。また、B児も様々な児童と交流し、「なるほど」「その考えはおもしろい」等、声をかけてもらい、嬉しそうな顔をしている姿が見られた。

#### イ AL型としての学習活動づくりについて

本資料は挿絵からストーリーが想像しやすい(図-10)。そのため、事前に挿絵を配布し、予習としてストーリーの内容を考えさせた。そのため、「LINEでケンカしたんだ。」「返事が遅れて怒らなくても。」等、資料から考えられることや感じることを授業が始まる段階で持っていた。

資料から考えてきたことを出した後、主体的・協働的に活動していくために、そこから自分たちがどんなことについて考えを交流していきたいかを考えさせ、自分たちで交流する内容を決定させてから展開していくようにした。与えられたことではなく、自分たちで決めたことだったため、話し合いに対する意欲が高められたと思われる。

内容交流場面では、多くの意見と触れ合い、互いの考えを深めさせるために、全体交流の前に教室を自由に歩き回り意見を交流させるようにした。黒板に名札でどの立場かを掲示してからの交流だったため、黒板を見ながら、どの立場の人の意見を聞くか等、考えながら動く姿が見られた。



図-10 「鳴らないスマホ」挿絵

段階	学 習 活 動 と 内 容	具 体 的 支 援
導 入	1. 携帯やスマートフォンのことについて考える。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・もっていないけど、楽しそうだからほしい。</li> <li>・少しこわいイメージがある。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <b>【めあて】</b>            情報機器を使うときの大切な心を考えよう。         </div>	○学習の方向付けをするために、情報機器についての意識調査を事前にし、自分のことに繋げて考えられるようにする。  ○意識調査のずれからめあてにつなげる。
展 開 前 段	2. 「鳴らないスマホ」の挿絵をもとに、話し合う。 <ol style="list-style-type: none"> <li>(1) グループトークを始めたときの気持ちについて話し合う。               <ul style="list-style-type: none"> <li>・すぐに友達と連絡ができるので便利だな。</li> <li>・つながっている感じがして、うれしい。</li> </ul> </li> <li>(2) 返事がおそいときの気持ちを話し合う。               <ul style="list-style-type: none"> <li>・わたしはすぐに返信しているのに。</li> <li>・不安な気持ちになる。</li> </ul> </li> <li>(3) グループトークの必要性について話し合う。</li> </ol>	○事前に配布した挿絵から、物語の内容を推測させる。 ○児童が日常生活の中で体験した同じような出来事を想起させ、初めてグループトークをするという感情を共感的に理解させる。 ○SNSを通して、いつでもつながっていることの喜びと、いつもつながっていることへの大変さの間で心が揺れているこ

	<p>グループトークは必要なのだろうか。</p> <p>○必要である。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・気軽にやりとりができる。</li> <li>・使い方に気をつければ、とても便利なものだ。</li> </ul> <p>○必要でない。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・顔が見ずにやり取りをするのは難しい。</li> <li>・思いがけずに相手を傷つけてしまうこともある。</li> </ul> <p>情報機器を扱うときに、どんな心が大切になるのだろうか。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・思ったことや言葉についてふり返り、受け手である相手のことを思う心が大切だ。</li> </ul>	<p>とに気付かせる。</p> <p>○「必要である」と「必要でない」それぞれを5段階に分け、自分の考えを可視化しながら交流する。その際、多くの意見に触れられるように、教室を自由に回りながら交流させる。その後、全体での交流を行う。</p> <p>○自分と同じ考えや新しい考えの付け加えなどをメモし、互いの価値観の違いに触れながら、他者理解を深める。</p> <p>○交流後にもう一度、それぞれの立場を5段階で考えさせることで、考えの変化に気づかせる。</p>
展開後段	<p>3. 今日の学習・自分の生活をふり返る。</p> <p>今日の学習、今後の自分の生活についてどんなことを考えましたか。</p>	<p>○導入と比較して、学習を通しての情報機器へ考えの変化についても気付かせる。また、これまでの自分とこれからの自分の生活に繋げて考えさせる。</p>
終末	<p>5. 教員の説話を聞く。</p>	<p>○情報モラルについて、相手意識ができるような話を聞かせる。</p>



図一11 挿絵から考えを交流する様子



図一12 自分の立場を決める様子



図一13 席を立って自由に交流する様子

## 2 分析と考察

### (1) 児童に対するアンケート結果から見る学級全体の変容

「鳴らないスマホ」の学習後に情報モラルに関するアンケートをとると「ルールをきちんと作って使いたい」「相手のことを考えて使わないといけない」「責任をもって使わなければいけない」という意識が強まった」といった意見が数多く書かれていた。学習を通して、内容についての理解が深まっただけでなく、課題を解決するためにどうしたらよいかを自分たちで考えて話し合いを行ったことで、情報モラルに関する関心が高まったためと推測される。

また、「自分の意見を持てた」「友達に伝えることができた」「交流を通して考えが深まった」と

自由に使いたい・・・9人  
 ルールを考えようと思う・・・18人

図一14 事後の児童に対するアンケート結果抜粋



いうアンケート項目で、80%の児童が「よくできた」と回答した。交流場面を多く設定したことで、お互いに考えを出し合いながら学習を進めていくことに、楽しさを感じたようである。

## (2) Q-U アンケート結果から見る学級全体の変容

ALを活用したぬくもりの授業の実践前後での児童の変容を調べるために、Q-U アンケートを12月に実施した(図-15)。

実践前と後では、学級生活満足群に属している児童の割合自体は、実践前17人(50%)から実践後27人(77%)と高くなり、図-15を見ると、かなりの児童が右上(満足群)にプロットされている。相対的に見て、実践後は、満足の度合いが高くなっていることを示しているといえる。また、不満足群4人から2人、侵害行為認知群4人から2人、非承認群9人から4人と減っている。学級の中でみんなから認められていると感じ、自尊感情が高まった児童が増えたからではないかと推測される。このようなQ-Uアンケートの結果をふまえて、学級全体からとしてみると、学級生活に満足している児童が多い。この点からすると、AL型のぬくもりの授業は、自他の違いやよさを認め合う児童生徒を育てる上で有効であると思われる。

## (3) 抽出児童生徒の変容

### B児

感情のコントロールが苦手なB児は、Q-Uアンケートの実践前後の結果では、学級生活不満足群から学級生活満足群に属するようになった。承認得点が7点上昇し、被侵害得点が4点減少した。学校生活の中では、友達と関わるが増えた。相手を傷つける言動が減り、帰りの会のよいところ見つけでは、たくさんの友達から自分のよさを知らされ、笑顔になっている姿も見られた。授業でも発言することが増えるなどの変化があった。もともと思考力が高く他の友達が思いつかないような考えを持っていたが、表現することができていなかった。しかし、ALをいかしたぬくもりの授業の中で、徐々に伝えられるようになり、周りの友達からもB児の考えを聞いてみたいと言われるようになったことが要因として考えられる。さらに、主体的・協働的に学習していく中で、望ましいスキルが身に付き、相手の気持ちを察するようになってきたことも大きな要因として考える。

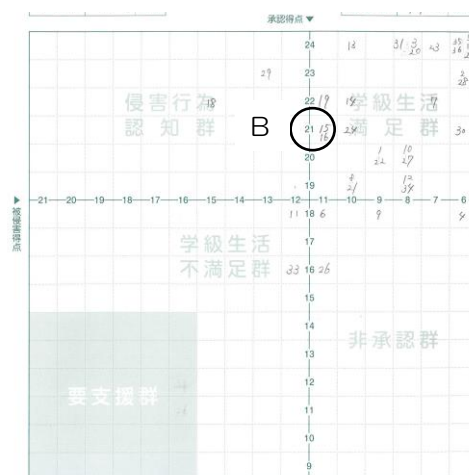


図-15 事後のQ-Uアンケート結果

## (4) 課題

AL型の授業では、児童は楽しさを感じ、積極的な授業参加が見られた。しかし、自由に話をするばかりになってしまい、ねらいからずれて、考えに深まりが見られない場合があった。そのため、ねらいを明確に伝えたり、繰り返し話し方や聞き方についてふり返ったりしなければならない。また、毎授業の最後に行ったアンケートで、「自分の考えをもつことができたか」「自分の考えを伝えることができたか」「友達の考えを聞くことができたか」「交流を通して自分の考えが深まったか」という質問に対し、いずれも回数を重ねるごとに平均としての数値は上昇したが、中には「自分の考えを伝えることができたか」の数値が下がっている児童も見られた。特定の児童が中心に話し合いが進んでいくことがあったためと推測される。その原因についてさらに検討していき、個別の支援や様々なパターンのAL型のぬくもりを活用した授業について考えていく

必要がある。

C 小学校第2学年

1 実践例

SEL-8S	ぬくもり
○チャイムの合図 ※休み時間の約束 ○しっかり聞こう ※正しい聞き方のポイント「うめのかさ」 ○自分のもちもの ※整理整頓のポイント「おすもーさん」	○心がホカホカになった（なかま） ○知りたいの（平和） ○あかちゃんのときのことしてる？（いのち） ○パンとメッセージ（しごととくらし）

(1) 題材名 「パンとメッセージ」(ぬくもり) 勤労 低学年 4－(2) (11月の実践より)

(2) 目標

- 働くことの良さを感じることができる。(ぬくもり教材の視点)
- 色々な職業に就いて頑張っている人たちがいることを知り、多様性を尊重しようとする態度を養う。(人権教育の視点)
- 友達との交流の中で、多様な考えに触れ、考えを広げることができる。(ALの視点)

(3) 児童の実態

素直で明るく、元気いっぱいの子どもたちである。昼休みは男女一緒に遊ぶことも多く、仲も良い。日直や給食当番、係り活動等の仕事も一生懸命取り組む。しかし、些細なことからのけんかがよくあるが、自分の主張だけをして、相手の思いを聞いておらず、誤解からのけんかも多い。

6月に行ったQ-Uアンケートの結果は、学級生活満足群が48%(13人)、非承認群が7%(2人)、侵害行為認知群19%(5人)、学級生活不満足群が26%(7人)であった。気になる児童については、家庭環境等も関係していると思われる。友達関係で満たされていないと感じている児童が数名いるので、自他を認め合うことができるような支援が必要である。

さらに、実証授業に関することでは、本学級の児童27名中、将来の夢について「ある」と答えた児童は18名、「ない」と答えた児童は9名であった。低学年の児童は、「ケーキ屋さんになりたい」や「野球選手になりたい」など、何かしら夢があるかと思われたが、3分の1の児童が、今の時点で将来に対する憧れがないことが分かった。本題材のパン屋さんや自分の身近な人たちの仕事に対する姿勢を考えることを通して、働くことへの興味、関心をもつきっかけとなれば良い。

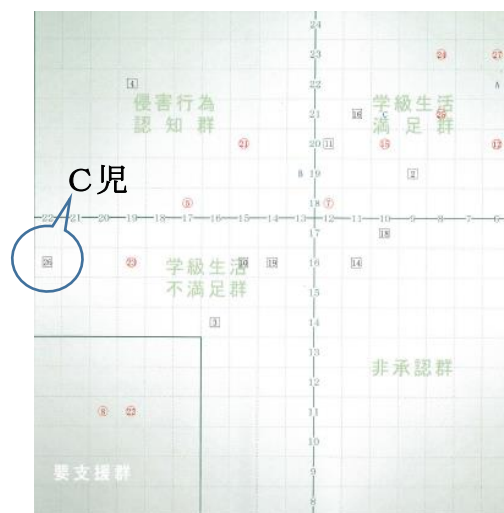


図-16 事前のQ-Uアンケート結果

抽出児童について

C児の実態

自尊感情が低く、「俺は、できんもん。」「どうせ、楽しくないもん。」などの否定的な発言が目立つ。学習においては、集中力や丁寧さに欠ける。自分に自信をもてずに、すぐに諦め投げ出す傾向にある。褒められると意欲的に活動に取り組むことができるので、自信をもたせるようにたくさん褒めたり、成功体験を積みせたりすることが必要である。6月に行ったQ-Uアンケートでは、C児は学校生活不満足群に属する。

#### (4) 指導の実際

##### ア ねらいとする価値

本題材は、「働くことの良さを感じる」ことをねらいとしているものである。現代社会ではフリーターやニートといった、定職に就かない人たちが増えてきている。非正規雇用の割合が全体の4割という、働くことが難しい現状にもある。こうした現実から、子どもたちに、仕事の意味や働くことの価値を問う学習は重要となる。

本題材は、パン屋を営む方が体験した実話に基づいている。交通事故にあい、入院生活を余儀なくされ、お店の休業に追い込まれたご主人は不安に陥った。しかし、休業を知らせるお店の貼紙にはお客さんからの心温まる励ましのメッセージがたくさん書かれていた。ご主人の仕事に取り組むひたむきな姿勢を考えるを通して、何のために働くのか、働くことの価値を考えさせることは大変意義深いと考える。

##### イ 資料の活用について

導入では、児童に対して事前に行ったアンケートの結果を伝え、学習への意識を高めた。将来の夢について「ある」と答えた児童の夢を数名分紹介した。名前を伏せて伝えたので、誰の夢だろうと関心を高めていた。夢を紹介する際には、なぜその仕事に就きたいのか、理由も合わせて伝えた。普段、将来の夢について話をすることがほとんどない児童にとって、学級の友達の夢について知ることができた。

展開前段では、まず、お店の貼紙に書かれたメッセージを見せて、誰から誰へ、どんな状況で書かれたものなのかを推測させた。そのメッセージの内容から、「パン屋さん?」「お客さんからのメッセージだ。」「病気になったの?」など、題材に興味をもたせることができた。

その後、資料を読み、お店のご主人や当時のお客さんの様子について考えさせた。その際、ご主人の努力や苦労などがより分かるように、グループでパン屋さんの仕事の内容を考えさせた。パンを焼くためにすること、陳列、店内の飾り付け、接客のことなど、友達と話し合うことで、色々な視点から仕事を考えることができた。仕事を想像するという活動は楽しくできていた。その活動で、自分たちの普段見えないところでもパン屋さんが頑張っていることに気付かせることができた。

展開後段では、前段の内容を踏まえ、自分の身近な人たちについて考えさせた。パン屋のご主人のように、自分たちの周りに頑張っている人がいないか思い出させた。そして最後に、題材同様、その人へメッセージを書かせる活動を行った。家族あてに書く児童が多くなったが、仕事への興味が感じられるメッセージもあった。

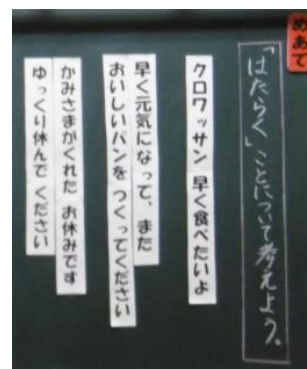


図-17 「パンとメッセージ」板書

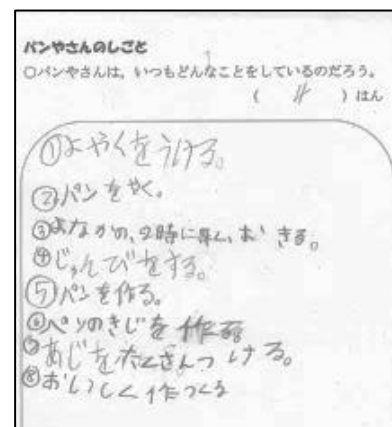
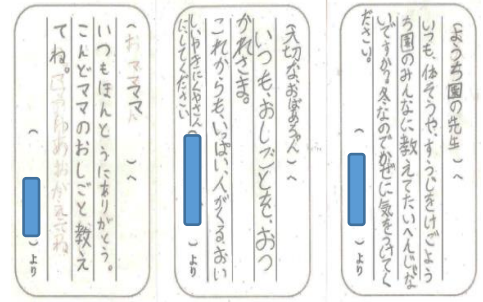


図-18 グループで考えたパン屋の仕事

段階	学習活動と内容	教員の支援
導入	1. 仕事について考え、本時めあてを知る。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・大きくなったら、野球選手になりたい。</li> <li>・ケーキが好きだから、ケーキ屋さんになりたい。</li> </ul> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;">             めあて 「はたらく」 ことについて考えよう。           </div>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 学習への方向付けのために、将来の夢に関する事前アンケートの結果を紹介して、本時めあてにつなげる。</li> </ul>
展開前段	2. 資料「パンとメッセージ」を読み、話し合う。 <p>(1) 交通事故にあって、入院することになった山田さんの気持ちを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・どうしよう、不安だ。</li> <li>・お客さんにパンを食べてもらえない。</li> </ul> <p>(2) 治っていないのに、早めに退院してお店を再開したのはなぜか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お客さんから、メッセージをたくさんもらって励まされた。</li> <li>・お客さんがパンを待っている。</li> </ul> <p>(3) 山田さんは、なぜそんなに頑張っているのかを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お客さんにおいしいパンを食べてほしい。</li> <li>・みんなに喜んでほしいから。</li> <li>・お金を稼いで、生活するため。</li> <li>・パンを作ることが好きだから。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ メッセージを見せて、誰から誰へ、どのような状況で書かれたものなのかを推測させてから資料に入る。</li> <li>○ このパン屋さんは、山田さん一人でパンを作っており、店を閉じると死活問題であり、山田さんが病室で不安に陥ったことを伝える。</li> <li>○ 実際に、300件にわたるメッセージがあったことを伝える。</li> <li>○ 見えないところでも努力していることに気付かせるために、パン屋の仕事をグループで考えさせる。</li> <li>○ 働くことは、みんなのためだけではなく、自分のためでもあることに気付かせる。</li> </ul>
展開後段	3. 自分の生活を振り返る。 <p>(1) 自分たちの身近に、頑張っている人たちがいないか考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・お父さんやお母さん。</li> <li>・給食室の先生。</li> <li>・いつも買い物に行くお店の人。</li> </ul> <p>(2) その人にメッセージを書く。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・いつも朝早くから、夜遅くまで一生懸命働いてくれてありがとう。</li> <li>・お父さんのお仕事は、何を作っているの？詳しく知りたいな。</li> <li>・私も、お母さんのような看護師になりたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 山田さん同様、色々な職業において一生懸命働いている人たちが、自分の周りにもいることに気付かせる。</li> <li>○ 「今日の学習で」の振り返りの代わりに、メッセージを書かせる。</li> <li>○ 働いている人に、感謝の気持ちをもつだけではなく、仕事に興味をもったり、働くことに魅力を感じたりできるようにする。</li> </ul>
終末	4. 教員の話聞く。	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 働くことは、みんなのためだけではなく、自分のためであることも感じられるようにする。</li> </ul>



図一19 グループ交流の様子



図一20 メッセージの内容

## 2 分析と考察

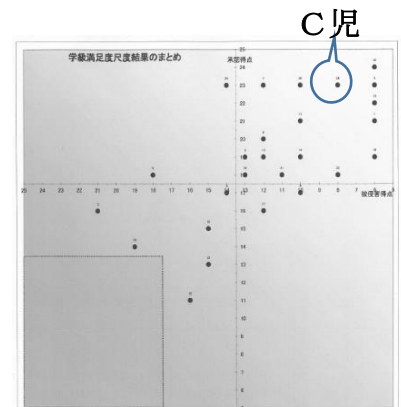
### (1) 児童に対するアンケート結果から見る学級全体の変容

実証授業前に行った、働くことに関するアンケートによると、「なぜ働くのか」という問いに、「家族のため」「お金を稼いで生活するため」「分からない」という回答が出た。実証授業後には、「分からない」という回答がなくなり、これまでの「家族のため」「お金を稼いで生活するため」に加え、「みんなを幸せにするため」「町が楽しくなるから」「仕事が好きだから」、「自分が楽しいから続けたい」等の回答が得られた。また、将来の夢について、「夢がない」と答えていた9名の児童のうち、夢がもてた児童が4名増えた。さらに、「大きくなって働くことは楽しみか」という問いには、将来の夢がない児童も含め、全員が「楽しみ」と答えた。「ドキドキ、わくわくする」「大変そうだけど、楽しそう」「早くやりたい」「早く大人になって人を助けたい」などの回答が出た。

実証授業で、多くの児童が「働く」ことの良さを感じることができたと考える。今は夢がない児童も含めて、大人になって仕事をすることは楽しみと考えることができたのは大きな成果である。

### (2) Q-U アンケート結果から見る学級全体の変容

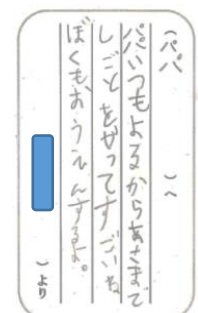
AL型授業の実践前後での児童の変容を調べるために、12月に2回目のQ-Uアンケートを実施した(図一21)。その結果、学級生活満足群が48%(13人)から63%(17人)、非承認群が7%(2人)で変わらず、侵害行為認知群19%(5人)から7%(2人)、学級生活不満足群が26%(7人)から23%(6人)に移行している。比較的、全体的に良い方向へ変容していることが分かる。このことから、AL型の授業は、自他の違いや良さを認め合い、学び合う児童生徒を育てる上で有効であると思われる。



図一21 事後のQ-Uアンケート結果

### (3) 抽出児童の変容

C児は、自分の思いや感想を書いたり、述べたりすることが苦手である。しかし、本時の展開後段におけるメッセージを書く活動では、自分の力でメッセージを書くことができた。また、今は夢がないけれど、大きくなって働くことが楽しみであると答えていることは、働くことのよさを少なからず感じる事ができたと考える。実証授業後のC児は、Q-Uアンケートによると学級生活満足群へ移行している。以前に比べ、随分自主学習を頑張ったり、前向きな発言が増



図一22 C児のメッセージ

えたりと、自信をもって色々なことに取り組む姿がたくさん見られるようになっている。AL 型の授業を行うことで、自分の思いを伝えやすくなったり、さらには友達から認めてもらったりしたことも要因と考えられる。

#### (4) 課題

本時は、児童が主体的・協働的に取り組めるように、①はじめに何のメッセージかを推測する、②パン屋の仕事をグループで考える、③自分の周りにいる人にメッセージを書くという3つの活動を仕組んだ。①のメッセージの推測では、題材に興味をもたせることができた。②のパン屋の仕事を考える活動は、色々な視点から仕事を考えることができ、みんなで楽しく取り組めた。しかし、授業のねらいに合わせてしっかり考えさせないといけない場面での交流はしなかった。どの場面で交流をするのが良いのかを考える必要がある。その際、ただ単に交流活動をしているだけにならないように、本時のねらいを意識し、学年の発達段階に合わせて交流を取り入れなければならない。また、③の身近な人にメッセージを書く活動では、家族あてが多かったため、勤労というより家族への感謝というメッセージの児童もいた。メッセージを書く前に、家族以外で頑張っている人たちをしっかりと想起させるべきであった。AL 型授業を行う際に、どの場面で、どのような活動をさせるかを検討する必要がある。

### 第三章 研究のまとめ

#### 1 研究のまとめ

本年度は、自他の違いやよさを認め、学び合う児童生徒を育成するために、「ぬくもり」を活用したAL型の学習活動づくりの在り方を研究した。

自他の違いやよさを認め合う実態の分析、道徳の時間におけるALを取り入れた「ぬくもり」の学習活動づくりの工夫に重点を置いて実践した。以下、成果と課題を述べる。

##### (1) 「ぬくもり」のよさについて

- ・福岡市独自の人権読本ということで、地域のことが取り上げられ、身近な課題として捉えることができる。
- ・教員にとっても学びとなり、扱っている題材が身近にあるため、教材研究がしやすい。
- ・読み物としてだけでなく、様々な活用方法ができる。
- ・人権8課題に対応しているため、人権課題に対する意識が高まりやすい。

##### (2) 「ぬくもり」をAL型で行う有用性について

Q-Uアンケートの結果から、学校生活満足群に属している児童生徒の割合が高まり、学校生活不満足群に属している児童生徒の割合が低くなった。人権に関するアンケートから教材にある人権課題に対する意識の高まりも見られた。これは、ALを取り入れたことで、コミュニケーションを取りながら、「ぬくもり」が扱う人権課題の解決へ向けて、自他の考えを交流していったことが有効であったと言える。

##### ○成果

- ・導入段階で子どもたち一人ひとりが課題意識をもって自分の考えをもつことができた。また活動場面が増えるため、意欲の高まりも見られた。
- ・SGE,SEL-8Sを活用することで、さまざまなつながりができ、相手を大切にしたい規律を意識することができた。そのことで、安心して発言できる雰囲気ができ、意欲的に交流する児童

生徒が増え、「もっと考えを言いたい」「もっとみんながどう考えているか知りたい」という発言があり、楽しみながら主体的・協働的に活動することができた。

- ・ 黒板等を活用し、名前カードを貼ることで、自分がどんな考えでいるのかを、全員が意思表示をすることができる。
- ・ AL型の授業実践を通して、自信を持って発言する機会が増え、「なるほど、だからそういう考えなんだ」というように、多様なものの見方、考え方の交流につながり、自他の違いやよさに気づく姿がみられた。
- ・ 題材を読みものとしてだけでなく、そこから自分たちの身近な課題に結び付けて、主体的・協働的に考えを交流する姿が見られた。

#### ●課題

- ・ 人権教育のねらいを意識しながら取り組まないと、活動させることだけになってしまう。
- ・ AL型の学習は規律が整っていないと、成り立たない。そのため、SGE,SEL-8Sを並行して行うことで、時間が必要となる。また、定期的にSEL-8Sを生かして学習規律を振り返る必要がある。
- ・ 児童の主体的・協働的な活動の中で、目標に近づくために、児童に全て任せるのではなく、どのように教員が支援していくかについて検討していく必要がある。
- ・ 題材に合わせてALを生かした学習活動づくりを増やしていく。

#### あしがき (文責 伊藤 文一)

人権教育の課題は、「どんな力を、どのようにして身に付けさせるか」である。

まず、「どんな力を」について考えてみると、保育所保育指針「人間関係」(3章(二)イ)には次の内容が上げられている。

- ①友達と積極的にかかわりながら喜びや悲しみを共感し合う。
- ②自分の思ったことを相手に伝え、相手の思っていることに気付く。
- ③友達の良さに気付き、一緒に活動する楽しさを味わう。
- ④良いことや悪いことに気付き、考えながら行動する。

次に「人権教育の指導法等の在り方について(第3次とりまとめ)には、以下の様に記されている。

- 他者への想像力、共感的理解力、感受性
- 伝え合いわかり合うためのコミュニケーション能力
- 人間関係調整能力、非暴力的問題解決能力、技能
- 自己自身の行為への責任感

さらに、「どのようにして身に付けさせるか」については、その手がかりとして、谷口研二(公益社団法人福岡県人権研究所事務長)は、①自尊感情、②体験(感動体験)、③言語の力、④成長モデルとの出会いとしている。

本研究室では、人権読本「ぬくもり」を通して、研究テーマを「自他の違いやよさを認め、学び合う児童生徒の育成」とした。児童生徒が主体的・協働的に取り組めるようにアクティブ・ラーニング型の授業を実施した。児童生徒は友達との多様な考えに触れることで自他の違いや良さを認め合い、授業が活性化して、児童生徒の人権への意識が少し高まったと考えている。

## 資料等

### 引用文献

- 1 文部科学省 人権教育・啓発に関する基本計画（平成 14 年）
- 2 文部科学省 人権教育の指導方法等の在り方について〔第三次とりまとめ〕（平成 20 年）
- 3 福岡県教育委員会 人権教育指導者の手引きⅡ  
～人権尊重の学校づくりを進めるために～（平成 24 年）

### 参考文献

- 1 人権教育及び人権啓発の推進に関する法律（平成 12 年）
- 2 文部科学省 人権教育の指導方法等の在り方について〔第二次とりまとめ〕（平成 18 年）
- 3 福岡市教育委員会 授業改善の手引き（平成 20 年）
- 4 福岡市教育委員会 新しいふくおかの教育計画（平成 21 年）
- 5 福岡市教育委員会 人権教育指導の手引き（平成 24 年）
- 6 福岡市教育委員会 人権教育推進プラン〔学校教育における人権教育〕  
人権教育指導者手引き～児童生徒の人権感覚を育成するために～（平成 21 年）
- 7 Teacher' s Teacher 児童がかがやく風土づくりの実践と理論 謳歌書房（平成 22 年）
- 8 社会性と情動の学習（SEL-8S）の導入と実践 ミネルヴァ書房（平成 23 年）
- 9 社会性と情動の学習（SEL-8S）の進め方 小学校編 ミネルヴァ書房（平成 23 年）
- 10 社会性と情動の学習（SEL-8S）の進め方 中学校編 ミネルヴァ書房（平成 23 年）
- 11 アクティブラーニング入門  
～アクティブラーニングが授業と生徒を変える～ 産業能率大学出版部（平成 27 年）
- 12 アクティブラーニングの教授学習パラダイムの転換 東信堂（平成 26 年）
- 13 福岡市教育委員会 人権読本『ぬくもり』の研究と指導 第三版（平成 27 年）
- 14 人権教育の理論と指導法 福岡女学院大学伊藤研究室（平成 27 年）

### 研修員

瀬戸 剛（多々良小学校教諭）  
塩田 奈々（舞鶴小学校教諭）  
宮原 直己（西新小学校教諭）

### 研究指導者

伊藤 文一（福岡女学院大学人文学部教授 教職支援センター長）  
原田 雅秀（研修・研究課 主任指導主事）  
宇都宮 美保（研修・研究課 主任指導主事）